

学位請求論文審査報告要旨

2019年11月6日

申請者 陳 夢夏

論文題目 中国語母語話者の二字漢字語の受容における母語の影響

—母語知識の利用に着目して—

論文審査委員 庵 功雄

太田 陽子

奥野由紀子

1. 本論文の内容と構成

本論文は、中国語を母語とする日本語学習者（以下、中国語話者）による日本語の二字漢字語の習得研究であり、その目的とするところは、母語の知識を利用して効率よく漢字語の学習を行うための基礎的研究である。

中国語話者は、日本語と漢字を共有しているため、漢字語（漢語）の習得において他の言語の母語話者に比べて優位な位置にある。しかし、日中両言語における漢字語には意味の重なりとズレが存在し、それが負の転移の要因になることも知られている。

本論文は、こうした問題意識に立ち、これまで議論されてこなかった新たな観点を加え、中国語話者の二字漢字語の習得に役立つ新しい枠組みと、より適切な調査法を提案し、日本語習熟度、学習者の知識レベル、ストラテジーの使用、語の習得難易度、という4つの観点から、中国語話者による日本語の二字漢字語の理解の実相を明らかにしたものである。

本論文の構成は次の通りである。

第1章 序論

- 1.1 本研究の背景と目的
- 1.2 本研究で扱う用語の定義
- 1.3 研究方法
- 1.4 本論文の構成

第2章 従来の日中漢字語の意味対応関係

- 2.1 日中両国語における漢語・漢字語
- 2.2 漢語・漢字語のみの意味分類
- 2.3 その他の分類
- 2.4 新しい枠組みの必要性

第3章 従来の意味対応関係に基づく研究

- 3.1 学習者の中間言語を見る研究
- 3.2 意味推測の研究
- 3.3 認知処理過程の研究

3.4 既存の辞書とデータベース

第4章 既存の枠組みと手法に基づく探索的調査（調査1）

- 4.1 調査の目的
- 4.2 調査概要
- 4.3 分析と結果
- 4.4 考察
- 4.5 まとめ

第5章 日中対照分析の枠組みの提案

- 5.1 新たな枠組みの提案
- 5.2 分類の作業
- 5.3 まとめ

第6章 新たな枠組みに基づく質的調査（調査2）

- 6.1 調査目的
- 6.2 調査内容
- 6.3 分析方法
- 6.4 結果
- 6.5 考察

第7章 新たな枠組みに基づく量的調査（調査3）

- 7.1 調査目的
- 7.2 調査方法
- 7.3 調査概要
- 7.4 分析と結果
- 7.5 考察

第8章 総合的考察

- 8.1 結果のまとめと総合的考察
- 8.2 本研究の意義

第9章 終章

- 9.1 本論文のまとめ
- 9.2 日本語教育への応用
- 9.3 今後の展望

引用文献

参考文献

調査資料

2. 本論文の概要

本論文は9章からなる。

第1章では、本論文の背景と目的が語られる。

中国語話者は全世界の日本語学習者の70%以上を占めており、日本語教育にとって極めて重要な対象であるにもかかわらず、これまで、中国語話者のための習得研究はほとんどなされてきていない。

文法記述研究においては、効率的な言語教育のために、学習者の母語を考慮した研究が必要であることが提唱されており、「母語の知識を活かした日本語教育」という、正の転移を積極的に活用することを推奨し、「母語でなら言えることを目標言語でも言える」ことを目指す考え方も存在している。

特定の母語話者、特に中国語話者を対象とする語彙学習・語彙研究も上述の考え方と共通するところがあり、母語知識を利用して効率よく漢字語の学習を実現するためには、中国語話者の立場からした日中対照研究と習得研究を行う必要があることが述べられる。

その他、本論文で用いる用語についての定義も述べられている。

第2章では、本論文に関連する先行研究が検討されている。

この分野の研究の出発点となっているのは、文化庁(1978)『中国語と対応する漢語』であり、そこで提案された「S語(Same。意味が同じか、極めて近いもの)」「O語(Overlap。意味が一部重なっているが、両者の間にずれのあるもの)」「D語(Different。意味が著しく異なるもの)」「N語(Nothing。中国語に存在しないもの)」という分類基準は、様々な批判を受けつつも、議論の出発点となっていることが述べられる。その上で、文化庁を批判的に検討した論文が紹介され、それらについて論じられる。

第3章では、学習者の中間言語、意味推測、認知処理過程という第2章とは異なる観点から、引き続き先行研究の検討が行われる。

そうした検討を踏まえ、調査方法上の問題点として、「未知語」の内容を厳密に規定することや、従来の1つの意味を問う調査だけでなく、複数の調査を行うべきであることが論じられている。

第4章では、既存の最新の枠組みと最も頻用される調査法である発話思考法を用いて行われた探索的調査の内容が述べられ、中国語話者が未知語の意味を類推する際のストラテジーとして、語彙知識、文脈情報、文法知識、世界知識の4つが抽出された。

具体的には次のようなことが明らかになった。

1) JFL (Japanese as a Foreign Language) 環境と JSL (Japanese as a Second Language) 環境の間では、推測の手がかりの内容に違いはないが、手がかりのパターンに違いがあり、JSL 環境の方がより語彙的手がかりを多く使用している。

2) JSL 環境にいる学習者は日本語との接触が多く、JFL 環境にいる学習者より日本語能力に自信を持っているため、語彙知識のみという方法をよく使ったが、正しい結果にたどり着けないことが多かった。逆に、JFL 環境の学習者は語彙知識のみという方法をあまり使わなかったが、正答率が高い。一方、JSL 環境の学習者はより文脈から役立つ情報を探す能力が高いため、文脈情報のみという方法を使うときは、JFL 環境の学習者より成績が良い。

3) 提示する文脈の長さは、文章なら 3 行ぐらいが一番理想的であり、文脈の内容は、個人の好みに合っているほうがモチベーションを高める。

第 5 章では、以上の検討、考察を踏まえて、比較のための新しい枠組みが提案される。まず、新しい枠組みが必要である根拠として以下の 3 点が述べられる。

1) 中国語母語話者を対象とする日本語教育の立場から考え、役立つ枠組みを提案するのなら、中国語母語話者の視点から意味対応関係を見直す必要がある。

2) 辞書ベースの分類基準ではなく、使用実態、すなわち具体的な文脈を見ながら分類基準を定める必要がある。

3) 多くの語は複数の意味を持っているため、語単位ではなく、意味単位で分類すべきである。

その上で、母語知識を利用するという観点から、新しい分析の枠組みが提案される。

第 6 章では、初級と中上級の学習者を対象とし、二字漢字語の理解において、語のタイプ、利用するストラテジーの違い、未習・既習の別、という 3 つの側面から検討するために、質的調査を行い、以下の結果が得られた（語のタイプについては後述）。

1) 初級学習者にとって、未習の場合、SJO 類がもっとも簡単であり、その次が OJO 類であり、NJO 類がもっとも難しいと言える。その差は、手がかりの使用とは関係なく、類自体の難易度の違いである。

2) 中上級学習者にとって、既習の場合、SJO 類が OJO 類・NJO 類より簡単であると言え、その差は手がかりの使用と大きく関わると考えられる。SJO 類の場合は、既習の意味を文脈に入れて検証し、肯定的フィードバックを得て、確信できるというプロセスを経てきたが、OJO 類と NJO 類の場合は、文脈で再確認しても完全に確信できなくて、さらに色々な手がかりを使って推測するというプロセスを経ていることがわかった。

第 7 章では、調査時点で出題語の知識を学習者が持っているか否かを厳密に把握した上で、学習者の二字漢字語の理解と学習者の知識レベル（既知か未知か）、日本語能力（L2 能力）、漢字語のタイプ（語のタイプ）、漢字語のレベル（語のレベル）との関連性について調査を行い、以下の結果が得られた。

1) 語彙学習を通して、知識レベルが低い語（未知語）の習得が進んできた。

2) 未知語の場合、上級学習者（上位群）にとっては、語のタイプ別の正答率の差は見られなかったが、中級学習者（中位群・下位群）にとっては、SJO 類が OJO 類・NJO 類より正答率が高い。一方、既知語においては、L2 能力と関係なく、SJO 類が OJO 類・NJO 類より正答率が高い。未知語の場合、上級学習者では、語のタイプ別の正答率の差が見られないが、中級学習者では、SJO 類が OJO 類・NJO 類より正答率が高い。一方、既知語の場合、L2 能力と関係なく、SJO 類が OJO 類・NJO 類より正答率が高い。

第 8 章では、行った 3 つの調査を総合的に考察し、以下の結論が得られた。

1) 未知語の場合は、語のタイプと関係なく、「語」「文」「統合」という 3 種類のストラテジーが使える。そして、同じ「統合」というストラテジーを使っている、語のタイプの間には正答率の差があり、SJO 類、OJO 類、NJO 類の順で正答率が減っていく。

2) 既知語の場合は、SJO 類に出会った際に主に「検証」というストラテジーが使われたのに対して、OJO 類と NJO 類に出会った際には、「検証」か「推測」というストラテ

ジーが使われた。SJO 類の正答率はほぼ 100%であり、OJO 類と NJO 類より高いが、OJO 類と NJO 類の間に、正答率でもストラテジーの使用でも差はなかった。

3) 正答率と日本語習熟度との相関を検討した結果、未知語の場合、初級では SJO 類、OJO 類、NJO 類の順に正答率は低くなるが、中上級においては、SJO 類の正答率は OJO 類・NJO 類より高いが、OJO 類と NJO 類の間に差はなかった。一方、既知語の場合、日本語の習熟度と関係なく、SJO 類の正答率が OJO 類と NJO 類より高かった。

第 9 章では、本論文のまとめ、日本語教育への応用と今後の展望が述べられる。

3. 本論文の成果と問題点

本論文の成果は次の通りである。

第一の成果は、これまでの先行研究を十分に踏まえつつも、それらにはない独自の分析上の枠組みを提示したことである。具体的には、中国語話者の知識という観点から分類基準を考察したことである。これまでの研究では、辞書的意味を元に、語単位で対応関係を考えてきた。しかし、中国語話者が実際に持っている知識を基準に考えるとすれば、考察の単位は「語」ではなく、「意味」でなければならない。

例えば、A という中国語の語が X1、X2 という 2 つの意味を持っており、X1 の意味では日本語と同形同義（つまり、日本語にも A という語形が存在し、その意味は X1 である）であるが、X2 の意味では日本語と異なる意味（つまり、日本語には A という語形が存在しないか、A が存在したとしてもその意味は X2 ではない）の場合、A という「語」単位ではなく、X1、X2 という「意味」単位ごとに同形同義（先行研究で言う「S 語」に相当）であるか否かを定める必要がある。

本論文では、こうした立場に立ち、中国語の二字漢字語を、意味別に、「中国語の漢字語の意味が日本語の漢字語の形および意味と同じである」SJO (Same in Japanese Orthography) 類、「中国語の漢字語の意味と同形の日本語の漢字語は存在しないが、同じ意味の別形の日本語の漢字語は存在する」OJO (Overlap in Japanese Orthography) 類と、「中国語の漢字語と意味的に対応する日本語の語が存在しない」NJO (Nothing in Japanese Orthography) 類に分類することを提案し、「語」ではなく、「意味」を単位として日中両言語の対照研究を行っている。

本論文で提案された枠組みは、以上の点において、これまで提案されてきた全ての分類よりも高い妥当性を有している。なぜなら、中国語話者が実際に日本語を考える際に用いる知識は「語」単位のものではなく、「意味」単位のものであると考えられるからである。

第二の成果は、調査方法に関するものである。

本論文では、調査方法について慎重に検討した上で、その結果を踏まえて、3 つの異なる方法で、漢字語のタイプ (SJO、OJO、NJO) だけではなく、漢字語のレベル (旧日本語能力試験における該当級) や、習熟度 (中級、上級)、学習環境の差 (JFL 環境、JSL 環境)、学習者のストラテジー (語彙知識、文脈情報、文法知識、世界知識) など様々な観点から漢字語の受容に与える影響を明らかにしているが、これは本研究の大きな成果である。

第三の成果は、調査対象語の選定に関するものである。

本論文では、調査対象語の選定に際し、留学生用の読解用データベースを用いて 500 語を選定し、コロケーション情報を得るための現在利用可能な最も大規模な Web サイトである NINJAL-LWP for TWC を用いてコロケーションを精査し、辞書の記述も参照しつつ、高頻度の意味と用例を選定し、選定されたものについてさらに母語話者のチェックを経るといった手順で、1000 の意味 (500 語について、各々 2 つの意味を抽出) を特定している。このようにして作成されたリストは、本論文の巻末に挙げられているが、このリストは、これまでの研究では類似のものが発表されたことのない、独創性に富んだものであり、中国語話者向けの日本語教材の作成のみならず、中国語の知識を持たない日本語教師にとっても極めて有用なものであると言える。

こうした成果を挙げている本論文であるが、問題点も一部に存在する。

第一は、論旨の展開に関するものである。

本論文は、第 4 章で探索的調査を行った後の第 5 章において新たな枠組みの必要性が論じられるという構成になっているが、第 4 章の調査の後になぜ第 5 章の枠組みが必要になったのかについての説明が不足しており、読者が論旨の展開を追いにくくなっている。それ以外にも、用語の説明などにおいて、最後まで読まないで内容がつかめないものが散見される。これらが整理されていれば、論の展開がよりわかりやすくなっていたと思われる。

第二は、調査語の選定に関してである。

本論文では、上述のように、相当数の語を意味別に日中両言語間で対照し、詳細なリストを作成している。しかし、実際の調査対象語としては全て異なる語が採用されており、中国語で 2 つの意味を持つ場合の一方が SJO 類、他方が OJO 類といった形で異なる場合の 2 つの意味を持つ同一語は調査対象に含まれていない。もし、これらを調査語に含めていけば、同じく SJO と OJO や NJO を比較する場合でも、中国語として同じ形式である (つまり、多義語の) 類間で比較する場合と、中国語として別の形式である 2 つの類間で比較する場合とで、学習者の認識に差が見られるのが明確になり、本論文の成果をより厚みのあるものにすることができていたと思われる。

第三は、日本語教育への応用に関するものである。

本論文では、研究成果の日本語教育への応用に関わる記述は非常に抑制的になっている。しかし、実際には、上述のように、調査対象語選定の副産物とは言え、実用的価値の高いリストが作成されているのであるから、その点を本文中に記載すべきであったと思われる。

こうした問題点は存在するものの、これらは本論文全体が挙げた成果に比べれば大きな瑕疵とは言えない。また、陳氏自身もこれらの問題点に気づいており、今後の研究において、上記の問題点も確実に改善されると考えられる。

4. 結論

以上から、本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、陳夢夏氏に一橋大学博士 (学術) の学位を授与することが適当であると考えられる。

最終審査結果の要旨

論文審査委員 庵 功雄
太田 陽子
奥野由紀子

2019年10月23日、学位請求論文提出者、陳夢夏氏の論文「中国語母語話者の二字漢字語の受容における母語の影響—母語知識の利用に着目して—」に関する疑問点や関連分野について、逐一説明を求めたのに対し、陳氏はいずれも十分かつ適切に説明を行った。

よって、陳夢夏氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験において合格と判定した。